



中央図書館と文学館の全景

文学館常設展示場(2F)

北九州市立
文学館

友の会会報

創刊号

平成26年12月

「北九州市立文学館・友の会」 会長に就任して



北九州市立文学館友の会会長
後藤 みな子

私は北九州に文学館があることを誇りに思っています。

この度「友の会」の会長に就任して、まず、この素晴らしい文学館を多くの人に知って貰いたい。文学館と市民を繋ぐ為の役割をしたいと思いました。

その為の試みの一つとして「友の会」の会員の一人ひとりのご意見を聞きたいと「友の会の会員にアンケートを出しました。

その答えの中に「北九州市や九州にゆかりのある作家の展示会をしてほしい」「作家の時代背景や作品誕生の由来などを知りたい」

これは「友の会」への意見ではなくて「文学館」への意見でしたが、大変教えられるました。

文学館開館以来八年間、殆どの展示会は北九州・九州出身、北九州・九州ゆかりの作家の展示だったと思います。たまに、その方が来館した時に、そうではない作家の展示だったと思います。そして、どの展示もその作家、作品の時代背景、作品の誕生の由来、年表など丁寧に

解説しています。その度に私は感心もし、新たな知識を得て教えられもしてきましたので、このご意見には最初は意外な感じがしたのですが、これが現状なのだと思いました。文学館への来館が少ないことを再認識しました。これからの「友の会」のやるべきことを示唆されたご意見だと深く受け止めました。多くの人に「文学館」に来館して貰う為には「友の会」として何をすればいいのか。課題の一つがより鮮明に見えてきました。「文学館」の周りを「友の会」が取り囲んでいるのではなく、共に在りたいと思っています。共に悩み、共に進んで行きたいと思っています。

「文学館」に来ると、励まされる、人間としての勇気を与えられる、その文学の魅力伝える片翼になりたいと思っています。それには「友の会」の会員のお一人おひとりの力が必要です。声が必要です。皆様の声に謙虚に、そして丁寧に耳を傾けて、会長としての勤めに精進していきたいと思っています。

「友の会会報」創刊、

おめでとうございます



北九州市立文学館館長
今川 英子

「北九州市立文学館・友の会会報」の創刊、心よりうれしく存じます。

「友の会」の結成は、二〇〇六年十一月の開館当初よりずっと願っていたことでした。

文学館の責務は、地元ゆかりの文学者

や文学活動を掘り起こし、資料を収集調査、研究のうえ発表、展覧して、街の記憶、誇りとして次世代に引き継いでいくことですが、一方で文学館に多くの方にご来館いただき、文学を愉しんでいただくことも大切な役割です。

このような文学館をご理解ご支援いただき、殊に後者について先導し中心になって活動していただくことを「友の会」の皆さまに期待するものです。

例えば、文学館開設のコンセプトの一つに「賑やかな文学館」がありました。当館は、磯崎新さんの設計で、元は歴史博物館として建設されたものです。著名建築家の作品ということで、建物内部の大幅なりリニューアルはかなわず、したがって講座に適した空間等を作ることができませんでした。ならばそれを逆手にとってオープンスペースにして、その時々に応じて空間を設定できるような可動壁を作り、ワークショップや会合に使っていただきましょうということになったのです。ですから、壁面の内側には、それぞれのグループが道具を置いておけるような棚が多く作られるなど、工夫が凝らされています。「友の会」の皆さまがこのような当館を活用し、足繁く通って来ていただければと希うものです。

「友の会」の皆さまとご一緒に、文学の愉楽を味わい、文学館を盛り上げてゆければどんなにか嬉しいことでしょう。勿論辛口の忌憚ないご意見もいただき、それを謙虚に受け止めて、よりよい文学館にしていきたいと思います。

文学館が市民の皆さまと共に在るために、どうぞご理解ご協力賜りますようお願い申し上げます。

文学館「特別企画展」の支援について

今年も、文学館主催の「特別企画展」が開催され、成り裡に終了しました。

多くの市民に文学を啓蒙することが、文学館の使命だと思いますが、そのためには文学館に来ていただくことが何より大切です。一般には知られてはいないが重要な文学、文学者を知らしめるためにも、とにかく文学館に足を運んでもらわないといけません。硬軟混ぜ合わせた企画展を開催する意味がここにあります。

今年の企画展で「友の会」は展示会に並行して物品販売を行いました。企画展に所縁のあるグッズ、記念品を提供することで、企画展に来ていただいた方の満足感が高まり、企画展の成功に寄与したのではないかと思います。「友の会」の皆様にはボランティアでお手伝いいただきましたことを感謝し、お礼申し上げます。今後も「企画展」の開催に当たっては、「友の会」としてどんな支援が出来るかを考え、皆様にもお手伝いいただきたいと思っておりますので、よろしく願います。



映画と文学

北九州市立文学館と 小倉昭和館のコラボ



【夏の終り】©2012年 映画「夏の終り」製作委員会



【世界を壊して】©2009 Zuro Films グランジュア

「読んでから見るか、見てから読むか」ひと昔前の角川映画の宣伝コピーを憶えていますか。原作と映画どちらが先か。どちらもどうぞという相乗効果を目指したものです。

昭和館では昨年から北九州市立文学館で行われた三つの特別企画展に協賛上映をいたしました。

昨年五月「林美美子展」の折には、「北九州文学散歩」林美美子と郷土作家たちと銘打って、林美美子原作の『浮雲』『下町(ダウントウン)』『めし』に、それぞれ岩下俊作『無法松の一生』、松本清張『砂の器』、火野葦平『花と竜』を組み合わせて上映。地元の方々に好評いただきました。

次に十二月「恋と革命に生きた女たち展」では、瀬戸内寂聴原作『夏の終り』とレフ・トルストイ原作『安娜・カレーニナ』の二本立て上映。そして今年六月「モンゴメリと花子の赤毛のアン展」では、赤毛のアンの舞台となったカナダのプリンスエドワード島オーロロケ作品『アンを探して』とサウジアラビアの少女を描いた『少女は自転車にのって』の少女の成長物語二本立てで上映いたしました。この時は文学館、NHKの朝ドラの相乗効果で初めて昭和館にご来館いただくお客様も多く、コラボの力強さを改めて実感いたしました。

これからは原作の世界を映像でも楽しんでいただけるようなコラボ企画の映画上映を進めていきたいと思っております。

(小倉昭和館館主 樋口智巳)

おすすめの本

『春を恨んだりはいしない —震災をめぐって考えたこと—』

池澤夏樹・写真 鷲尾和彦

二〇一一年九月一日発行・中央公論新社

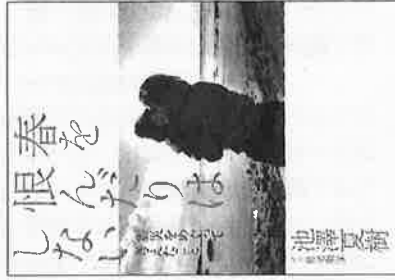
本書のタイトルは、ゲイスマグア・シンボルスカの詩「眺めとの別れ」から借りている。「またやつて来たからといって／春を恨んだりはいしない／略／わかっているわたしがいくら悲しくても／そのせいで緑の萌えるのが止まつたりはいしないと」。

著者は二〇一一年三月十一日の東日本大震災の衝撃以来、走り回りながら、被災者の悲嘆や願いを聴き、時々刻々と変化する事象をレポートして思索をめぐらせている。「—自然の脅威と現実社会（原発を含めて）の認識。突然逝つた死者たちに付き添うことのできなかつた私たちは、その悔恨の思いを共有し、前に向かつて歩くべきこと。日本列島全体の課題として、広範囲の者が不器用ながらも誠意をもつて被災地の人々に協働すること。そうすれば、将来に希望があると、生き残つた私たちの責務を示唆している」。

詩人C・K・ウイリアムズがある会で「倫理とは、想像力だ」とスピーチするのを聞き、著者は自分が探していたものに気づいたという。さらに、「誰の葬儀の鐘かと聞いてはいけない。それはおまえの葬儀の鐘だ」、つまり、人はみな孤島ではなく大陸の一部だ、というジョン・ダンの詩を引いている。

著者の深い思索は散文詩のように心に響いてくる。鷲尾氏の写真も美しく哀しい。一読をお勧めしたい書である。

(三村保子)



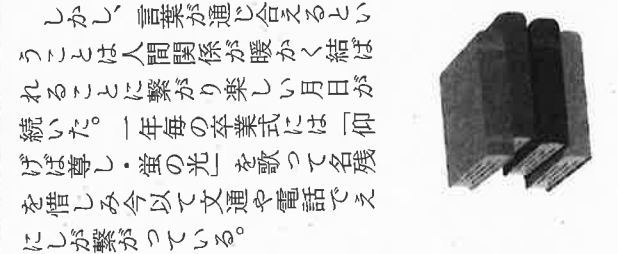
北九州市立文学館「友の会」アンケート

「友の会」は会員を対象に、今後の友の会活動の参考に資するためにアンケートを実施しました。
・実施日：2014年9月
・回収率：53.3% (90/169) 2014年9月末現在
結果は次の通りです。

- Q1. あなたは
 A 男性 44人 (49%) 女性 46人 (51%)
 B 10歳代～20歳代……0人 30歳代……1人 (1%) 40歳代……4人 (5%) 50歳代……8人 (9%)
 C 60歳代……22人 (24%) 70歳代……36人 (40%) 80歳代……19人 (21%)
 門司区 (7人) 小倉北区 (25人) 小倉南区 (15人) 若松区 (1人) 市外 (14人) 県外 (7人)
 八幡西区 (6人) 八幡東区 (8人) 戸畑区 (2人)
- Q2. 友の会を何でお知りになりましたか
 文学館の展示物……38人 市政だより……2人 友人・知人……31人 その他 (口コミ等) ……20人
- Q3. 興味のある分野は何ですか (複数回答あり)
 文学……181 (小説56、ノンフィクション35、詩24、児童文学17、短歌15、俳句28、川柳6)
 映画……25 演劇……22 音楽……33 美術……35 その他……4
- Q4. どのような事業に参加してみたいですか (複数回答あり)
 講演会……63 講座……27 研究会……4 文学散歩……12 朗読会……12
 イベント手伝い……6 その他……5

- Q5. 好きな作家
 ・夏目漱石 (6人) ・松本清張 (6人) ・森鷗外 (3人) ・村上春樹 (2人) ・井上ひさし (2人)
 ・川端康成 (2人) ・林芙美子 (2人) ・大江健三郎 (2人) ・東野圭吾 (2人)
 ・井上 靖 (2人) ・瀬戸内寂庵 (1人) ・杉田久女 (1人) ・火野葦平 (1人) ・田中慎弥 (1人)
 ・丸谷才一 (1人) ・吉村 昭 (1人) ・須賀敦子 (1人) ・渡辺淳一 (1人) ・五木寛之 (1人)
- Q6. ご意見、ご要望 (文学館に対するもの、友の会に対するもの)
 ①「友の会」メンバーの年齢が高齢すぎる、もっと若い人の参加が望まれる。(70代男性)
 ②「友の会」をもっと一般の人に知らしめて欲しい。私自身最近知った。(80代女性)
 ③高齢なため、出向くことが出来ない。会報や行事案内を楽しみにしている。(80代男性)
 ④会員には、特別展の図録等を送付していただけたらありがたい。(30代男性)
 ⑤地域に生きた作家、詩人、俳人などこの館ならではの特色ある展示、イベントを希望。(80代男性)
 ⑥北九州出身の文学者の里帰り講演会などを企画して欲しい。(70代男性)
 ⑦文学館の企画は、いつも素晴らしい。市民がもっと訪れるようになりたい。(70代男性)
 ⑧児童文学、絵本等家族を取りこめるイベント開催や、学校との連携強化 (例えば文学館課外授業) し、文学館訪問者の拡大を図る。(70代男性)
 ⑨学校等での巡回講座が出来ないか。「郷土作家の作品と読む会」や「映画と文学作品についての講座」など。(70代男性)
 ⑩文学と言った硬いイメージになるので、先般の「アン」や「ノンタン」の企画は良かった。今後は映画や美術、絵本などいろいろなメディアと結びつけた企画が良い。(50代女性)
 ⑪「アン」展示の時、展示資料の文字が小さく照明が暗くとも見づらかった。(60代女性)
 ⑫文学館には、気楽に入りやすい雰囲気がある。(70代女性)
 ⑬世代を超えて親しく参加できる催しを。文学館には、何となく入館しにくい雰囲気があり、エプロンして買い物籠揚げで気軽に立ち寄れる場がない。(80代女性)
 ⑭特別企画展のつなぎの空白期間の館の活用を提案する。文学館が図書館 (母と子供の図書館) と一体的な建物となっていて、その条件を活用して、文学館の通路、ロビーを活用してテーマごとに子供の本、絵本原画等の展示を開くため。(60代女性)

- ⑮会員14名の「語りの会」を組織しており、企画展等でイベントがあれば参加したい。(60代女性)
 ⑯御案内の文書で、ごきげんよう、とかのテレビのマネは止めていただきたい。文学に携わるものとしていかげんかなのか。(70代男性)
 ⑰市民レベルで文学に親しみ、「文学の街 北九州市」として発展することを願っている。(60代女性)
 ⑱市民にとって文学館は、どのような存在理由があるのか、より多くの市民に理解してもらえよう一層の努力を期待する。(70代男性)



「は」と「が」に悩んだ日本語教師

天川悦子

一九八五年から四年間、私は北京の科技大学で日本語教師を勤めた。現職の教師時代は国語教育には多少自信があった私だったが、ここにおいて日本語を外国人に教えることの難しさを、いやというほど感じさせられ根底から勉強させられた。

私「張さん、この手紙をだしてきてください」
張さん「先生、てきては何ですか」
私「雨が降り出したけど雨傘を持っていますか」
学生「先生、なぜあめかさと言いませんか」
学生「私はパンを食べます。と私がパンを食べます、とどう違いますか」等々。

日本人なら、小学校に上がる前に家庭や社会で何気なく覚え込む言葉が、日本語教育では最初に根本的に理解させなければ先に進めないということだった。それから王府井の本屋でやっと見つけた「日本語法」という厚い辞書と首つ引きで毎晩勉強し、学生を納得させることが出来るようになった。

言葉を教える中で気付いたのは、言葉によって民族性が培われる、ということだった。日本語はよく聞いていると、結論がよくわからないことが多い。中国語は「主語、動詞、目的語」がはっきりしている言葉が多い。日本人は、相手の気持ちを慮り「……ようです。……のようと思う。」など語尾をばかすので誤解されやすい面がある。

しかし、言葉が通じ合えるということは人間関係が暖かく結ばれることに繋がり楽しい月日が続いた。一年毎の卒業式には「仰げば尊し・蛍の光」を歌って名残を惜しみ今以て文通や電話でえにしが繋がっている。

会員投稿

